

イラストレーター、絵本作家
はせがわ よしふみ
長谷川 義史さん



プロフィール

1961年、大阪府藤井寺市生まれ。高校卒業後、デザイン専門学校を経てグラフィックデザイナーから現在のイラストレーター、絵本作家へ。主な作品に、絵日誌「もうすぐ赤ちゃんやってくる」（大和書房）、挿絵「忍者図鑑」（プロンズ新社）、絵本に「おじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃん」（BL出版）、「スモウマン」（講談社）など。90年、JACA日本イラストレーション展入選。02年、講談社出版文化絵本賞受賞。

描きたいです、 笑える絵本

とある図書館に、長谷川義史さんの絵本の有無を問い合わせしてみた。「お待ちせしました。いま手元にあるのが『スモウマン』と『ずいといん先生と化けの玉』、貸出中で 日に返却予定なのが『おじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃん』。あ、中央図書館にある『うえへまいりまあす』と『かあちゃんかじじゅう』は、取り寄せもできます」。

そう、大阪の住人にしてイラストレーターの長谷川さんは、すでに十数冊の絵本・児童書にかかわっている人気急上昇中の絵本作家なのだ。その作品に共通するのは、力強く存在感のある登場人物と、“読ませる”背景。なかでも「おじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃん」は、イラストレーターならではの特徴的な作品に仕上がっている。

絵を描きはじめてのは幼稚園の頃から。カレンダーやチラシの裏など「紙に白いところがあれば、絵を描いていた」そうだ。小学生の頃も、絵でよく褒められており「よく学校に1人が2人絵のうまい子がいるでしょ。そんな子ども

でした」。校内新聞に投稿した、先生の似顔絵が評判となったのは中学生時代。先生全員の似顔絵が、1ページの特集として卒業アルバムに採用されたほどだ。

高校卒業後は1年間「絵を描く仕事につきたかったから」と、デザイン専門学校へ。だが本当の修行は、グラフィックデザイナーの事務所で過ごしたその後の4年間だった。

「コンピュータも何も無く、昔かたぎの先生がいて僕らはアシスタントで」という、当時は珍しくも無い弟子入りの環境。だが、「仕事には厳しい」と評判のこの事務所で過ごした4年間が、プロとして生きるためのパスポートとなるのだ。「修行」を終え、中央区のデザイン事務所に就職する。「コピーライターやカメラマンがいて、初めて社会保険とかがあって(笑)」。スタッフデザイナーとして活躍した時代だ。

5年後29歳で独立し、結婚。大阪市内に事務所を持つ。主な仕事をグラフィックから、週刊誌の挿絵などのイラストレーションにシフトしていったのは、「自由に

自分の思いをそのまま絵にできる」から。

そんな中で、長男(9つ)の誕生を絵日誌にした「もうすぐ赤ちゃんやってくる」を出版。こうした作品をきっかけに描いたのが、初の絵本となる「おじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃん」(00年7月)である。

趣味は、自転車。毎日自宅近くを走るほか、長距離のサイクルマラソン出場のため、地方にも出かける。愛用の自転車は、フランスのルックやイタリアのコルナゴなどいずれもプロ仕様の高級車である。

ところで、最近心を悩ませている事に、子どもたちへの虐待問題がある。「昔なら大家族で子育てを分散していたでしょ。今は1人で向かい合っているから、ああいう残酷なことになるんでしょうか」。

今後の抱負を聞くと、「おもしろい絵本を描きたいです。笑える絵本。大阪で生まれ育ったから、いつも考えていました。笑えて、それでちょっぴりためになるもの」と笑顔で。新作「どどこどこ」の続編がまもなく出版される。

(文・脇本勤 / 写真・高島悠介)